

序 文

関本年彦先生は平成 19 年 1 月に古稀を迎えられ、成城学園就業規則に従い、平成 19 年 3 月末をもって成城大学経済学部を定年退職された。ご退任後ただちに経済学部教授会の総意により、成城大学名誉教授に推挙された。

本学経済学部教授会は、経済学会誌『成城大学経済研究』182 号を特別号として編集し、『関本年彦名誉教授古稀記念号』とすることを決定した。関本先生のご古稀を慶賀申し上げ、先生の長年にわたる学恩とご功績に心より感謝の意を表したいと考えたからである。

この企画のために、成城大学経済学会内で編集委員会が組織され、記念号への寄稿を協力依頼することとなった。その結果、関本先生の学恩に報いるように、日頃の研究成果を世に問う形で、多くの方々からご論考をお寄せいただいた。また、関本先生ご自身にはご経歴およびご業績のとりまとめにご協力いただいた。多くの方々のご協力を得て、茲に「記念論文集」を上梓することができたのは、ひとえに関本先生の篤実なお人柄の賜物である。改めて先生には御礼申し上げる次第である。もちろん、先生に捧げるのに恥ずかしくないものとなりえたのは、福光教授をはじめとする編集委員会の諸教授のご尽力によるものであることはいうまでもない。

関本先生は、昭和 35 年 3 月に東京大学理学部数学科をご卒業後、東京芝浦電機株式会社電子計算機技術部に入社され、昭和 41 年 2 月に朝日生命保険相互会社数理課に移られた。その後、昭和 45 年 8 月に広島大学理学部数学科に講師として就任され、2 年後に津田塾大学学芸学部数学科に助教授として移られている。そして、昭和 54 年 4 月に成城大学経済学部にも助教授として迎えられ、情報科学、コンピュータ論を担当されることになった。翌年には教授に昇任し、本学大学院経済学研究科経営学専攻修士

序 文

課程も併せて担当され、同年 10 月には計算機センター長に就任された。さらに昭和 60 年には経済学研究科経済学専攻博士課程後期も担当され、昭和 62 年 4 月から平成 3 年 3 月まで経済学部経営学科主任を、平成 3 年 5 月から平成 6 年 4 月まで経済学研究科経営学専攻主任をそれぞれ務められていた。

関本先生のご研究を一覧すると、電子計算機との関わりは先生のご研究で抜きにしては語ることができない大きな主題であったことがわかる。東芝時代、国産電算機の開発が国家の戦略として推し進められていく時代の黎明期にあって、電算機の開発に従事されていたと漏れ聞いており、また先生が成城大学に赴任された昭和 54 年に、本学でも 10 月計算機センターが旧 3 号館地下に立ち上がり、翌年 3 月に初代大型計算機 FACOM M130 F が導入された。同年 10 月に計算機センター長に就き、以後昭和 59 年 9 月まで長きにわたって計算機センターの運営体制の整備に尽力されたのである。本学経済学部には、情報科学、コンピュータ論のみならず、全学学生むけに計算機入門 を担当され、コンピュータによる情報処理教育に貢献されたことはいうまでもない。

このような事情もあり、関本先生のご研究には、コンピュータに関わる、とくに統計実務上のプログラムないし計算法(アルゴリズム)の開発やファイルシステムに関する論考が見られる一方で、中心極限定理や Banach 空間上の微分など既存の命題等をより一般的な土壌(位相空間)で証明し、解説するという、数学者としての関心から執筆された論考が他方で見受けられる。

とりわけ先生が赴任当初に執筆された論文「計算機処理用ファイル概説」は、大型計算機上で開発されていた仮想記憶装置処理法という、当時の最新の方法を解説したものであり、その基本的な方法は発展して現在のコンピュータに受け継がれているものである。また、「UNIX ファイルシステム・アーキテクチャ」は UNIX というオペレーション・システムの

序 文

なかで最も個性的な部分であるファイルシステムに注目し、コンピュータ論を担当された関本先生ならではの視点でその分析と考察を試みた論文であった。

統計実務上コンピュータを利用するための諸プログラムの開発という、もうひとつの大きな主題の上に乗った論考としては、90年代にかけて発表された諸論文があげられる。統計学の古典的分布関数の基盤となるガンマ分布に注目し、その分布関数を計算する数値計算法を論じた論文「統計学で用いられる古典的分布関数」、正規分布に関する議論から発展し、コンピュータ・プログラム用アルゴリズム(演算法)として用途の広い直交ベクトル系生成アルゴリズムをとりあげ、その拡張をはかった論文「ある直交ベクトル系生成アルゴリズム」、そして線形最小二乗法という統計学上の基本的推計法に対し数理的な基礎付けをおこない、そのアルゴリズムを考察した論文「線形最小二乗法の諸問題()」などがあり、先生の数理的アプローチとアルゴリズムという一貫した研究姿勢が見受けられるのである。

教育面では、講義ならびに演習において学生に対し誠実な指導を行われ、とくに演習においては先生のゼミナールは学部で人気を博しておられた。課外活動でも、漕艇部の顧問を務められ、伝統あるクラブのよき相談相手であり続けられた。このように、関本先生が成城大学経済学部に残された足跡は、忘れることのできない大きなものであり、先生が研究者として成してこられたご貢献と学生の育成に向けられた教育面でのご功績のおかげで、われわれ経済学部の今日がありえるのだということを改めて真摯に受け止めたい。

最後に、先生の長年にわたる学恩とご功績に感謝の意を表するとともに、ますますのご活躍と、いっそうのご多祥を祈念申し上げる次第である。

平成 20 年 11 月

経済学部長・経済学会長

明 石 茂 生